

話題の本棚

戸田山和久著『思考の教室 じょうずに考えるレッスン』

國分功一郎・熊谷晋一郎著『〈責任〉の生成—中動態と当事者研究』

特集／大学的読書事始め2021

新刊コーナー／私の本棚／クライストへの誘い

〒606-8316

京都市左京区吉田二本松町 吉田南生協会館 2階

Tel: 771-6211 / E-mail: teiyo@s-coop.net

綴葉HP: http://www.s-coop.net/about_seikyoku/public_relations/

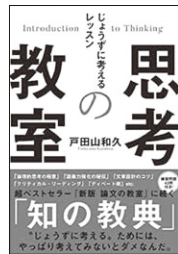
「考える」について考えるよしー！

思考の教室

じょうずに考えるレッスン

戸田山和久著

NHK出版



「考える」って、なんだろう。大学は考えることの連続だ。高校までは先生が問題を用意してくれて、それに答えればよかった。でも、大学からは違う。自分で「問い」を立てねばならない。そんな環境に足を踏み入れるいま、改めて「考える」ことについて考えてみよう。

本書は『論文の教室』などの著作で有名な戸田山氏の最新刊である。「じょうずに考えるレッスン」と副題のついた本書は、まさに「考える」ことについて徹底的に考える本である。先に結論を言えば、「よく考える」とは、科学・テクノロジー・制度をうまく使い、自分の考えた上手に付き合うこと、だと著者は言っている。なるほど。では、どうやってやるの？

それには、まず「論理」を意識することが大切だと著者はいう。

特に「疑似論理」という、一見論理的に見えるが論理的ではない話しかたには注意すべきとのことだ。たとえば、「ゲームをするのはダメだ。なぜならゲームはダメだからだ。」のような同語反復がその一例だ。その上で、相手に伝わる文章の書き方、生産的に議論をするためのクリティカルリーディングの仕方、など、今すぐ役に立つ方法論も満載だ。特に、文書の書き方のレッスンは、レポートや

メールなどでも即使できるので、実用性が高いだろう。……もちろん単なるテクニックとしてではなく、その原理を「考える」ことが大切なのは言うまでもないが。

評者の私が本書の中で特に興味を持ったのは、「練習問題」だ。本書は単なるメソッド書ではなく、読者が自分で考える練習ができるために、所要所に「練習問題」がついている。一見簡単そうに見えるが、考え始めるとなかなか答えが見つからない。受験勉強に専念していた新入生は、「お受験」型の問題との性質の違いに戸惑うかもしれない。だが、この問題を一つひとつ解いていけば、自然と論理的に考えること（ロジカルシンキング）や、批判的に文章を読むこと（クリティカルリーディング）が身につくだろう。入学したての新入生にとって、本書は高校までの勉強と、大学からの学問の橋渡しの存在に違いない。

余談——。大学生になると、紙のノートではなく、パソコンなどのデジタル機器でノートを取る人が現れる。「紙かデジタルか？」というこの議論に対し、著者も本書で一言を付している。どっちが良いと言っているかって？ どっちだと思おう？ まずは自分で考えて、その後本書で確認してみてほしい。

大学は考えることの連続だ。じょうずに考えるために、まずは本書でレッスンをするのも良いだろう。高校までで習わないような内容が多く、ちょっと読むのに骨が折れるかもしれないが、最後まで読み終えたとき、本書で学んだことは必ずやあなたの血肉になっているだろう。

（出席点）

（四三〇頁 本体一八〇〇円 10月刊）

誰の／誰のための「責任」

〈責任〉の生成

— 中動態と当事者研究

國分功一郎・熊谷晋一郎著

新曜社



公助よりも共助よりも自助の優先されるこの国では、自己責任論が猛威を振るう。それを表すニュースはいくらでもある。例えば薬物依存者は自らの意志で薬物を使用したと非難され、行為の「責任」を取るために刑罰を受ける。しかしこのような「責任」の取り方は本当に誰かにとっての救いとなっているのか。本書では「責任」を巡る様々な問いに対し、「中動態」の研究で知られる哲学者・國分功一郎と、「当事者研究」で知られる小児科医・障害学者・熊谷晋一郎という気鋭の学者二人が対話を通して答えようとする。

國分は言語学の研究を引き、古代ギリシヤ語では能動態の反対は受動態ではなく、中動態であったと述べる。例えば「謝罪する」という動詞について。能動態であれば「私が謝罪する」、受動態であれば「私は謝罪させられる」になり、「する」と「される」が対立する。しかし「謝罪する」という言葉は本来、謝る行為そのものを指すのではなく、「私が悪かった」という気持ちや「私」の中に起こり、謝るといふ行為へ至る過程を指す言葉である。主語の外で動作が完遂する能動態／受動態と違い、このように動詞によって名指される過程の場所として主語が存在する態を、中動態と呼ぶ。

一方、当事者研究とは、「当事者」が自分の生きづらさについて自

ら「研究」することであり、北海道の「べてるの家」で暮らす、主に統合失調症の当事者たちによって生み出された。熊谷は「自分たちのことは自分で決める」を台言葉とした障害当事者の社会運動（今月号の特集にある『当事者主権』（岩波新書）などを参考されたし）を評価しつつ、「決めること」自体が難しい人もいると指摘する。十全な決定をするためには、どのような結果がもたらされ、それが自分にとって望ましいかどうかを知っている必要がある。それを知らない人に決定を無理強いすることは、彼ら自身に「自分は努力が足りない」といった思いを抱かせ、自己責任論に追い込む。決定を保留し、自分は何に困っているのか、そもそも自分は何者なのかを知ろうとする当事者研究は、中動態的な研究なのである。

二人の対話が進むにつれ、議論は責任の概念の問い直しへと向かう。熊谷は依存症を例に論じる。薬物を飲んだ過去を否定し行為の原因を全て自分の意志に帰属させて刑罰を受ける、従来の能動態／受動態的な責任の取り方で、「私」は本当に責任を取ったことになるのかと。依存症の自助グループ・ダルクでは、振り返らないようにしてきた辛く苦しい自分の過去と丁寧に向き合い続けることを重視している。その上で、今まで傷つけてきた人々に罪を償おうという気持ちや自然と湧いてくること、つまり中動態的な主語として償う「私」という場が成立してようやく、贖罪の準備が整うのである。大学受験も自己責任論になりがちである。無事京大に合格できたのは自分の強い意志のおかげだと信じて疑わない新入生には、本書と下野千鶴子の東大入学式祝辞を送りたい。

（石透）

（四一九頁 本体二〇〇〇円 12月刊）

〈特集〉
大学的読書事始め
 2021

「良き書物を読むことは、過去の最も優れた人たちと会話をかわすようなものである」——デカルトはこう言います。本を読みながら、書き込みをしたり、問いを投げかけたり、ツッコミを入れたりする。そのようにして私たちは、時間と空間を超えて、その本の著者と言葉を交わすことができます。コロナによって友人と気軽に会話できなくなった今だからこそ、書物を繙き、その書き手と会話してみてはいかがでしょうか。脳内会話であれば、飛沫感染の心配もありませんです。



(はや)

京都の平熱

鷺田清一著

講談社学術文庫

おこしやす。京都。ページをめくれば「平熱の京都」が顔を出す。「古い寺社は多いが歴史意識は薄く、技巧・虚構に親む」……本書は206番系統のバスで京都を一周し、その道中を鷺田氏が語ったものだ。入学したての新生にとっては、p.22からのグルメの話は耳寄りだろう。△奇人△の話も「いかにも」かも。あ、ちなみに、ちゃんと京大と百万遍も出てくるよ。(二七四頁 本体九八〇円)

古都

川端康成著

新潮文庫

「春の花」「尼寺と格子」「きもの町」「北山杉」「祇園祭」「秋の色」「松のみどり」「深い姉妹」「冬の花」——京都の四季の移ろいの中で、生き別れた双子の姉妹は出会い、惹かれあう。しかし悠久の古都は変わらず、二人を町と山へと返す。コロナ禍で静寂に包まれる京都の通りを歩くと、川端の残そうとした閑雅な京の都の息遣いが聞こえてくる。

(二一八頁 本体五五〇円)

(出席点/石透)

掟上今日子の備忘録

西尾維新著

講談社文庫

今日子さんには今日しかない……。なぜかいつも事件の犯人扱いをされてしまう隠館厄介。彼が依頼した探偵は、総白髪の麗しい女性、掟上今日子だった。どんな事件も1日で解決する。そんな彼女は、実は記憶が1日しか保たない「忘却探偵」だった。厄介は今日子さんと共に、事件の解決を目指す。「京都の20歳」としてデビューした、西尾維新の軽快ミステリ。(三五六頁 本体七〇〇円)

帰れぬ人びと

鷺沢萌著

講談社文芸文庫

帰りたい、忽ちこの思いに駆られることはないだろうか。そんな時氷雪の海を越え巣へ還るのが海鳥ならば、帰る場所の喪失を知りながらも歩み続けるのが「大人」かもしれない。「大人」の一步手前にある若者たちの日常を切り取った本書は、鷺沢が一〇代で紡いだ作品集。喪失を哀傷するのではなく、諾いながら前を向いて生きる、そんな力強さがここにはある。(二五六頁 本体一七〇〇円)

(出席点/リンド)

ダイエツト幻想

磯野真穂著

ちくまブリマー新書

お城へ向かう途中で行き倒れるシンデレラ……。近年持て囃されている「シンデレラ体重」は、イギリスで作られた基準に従うと、栄養失調の状態であると判定されるのだ。では、そういった危険な「やせ願望」は、どのように社会に登場したのか。「かわいいの呪い」は、いかようにして蔓延ったのか。一人の人類学者が、多角的な視点からこの問題を解剖する。(二二四頁 本体八四〇円)

料理心得帳

辻嘉一著

中公文庫BIBLIO

著者は懐石の達人。山河が連ぶ四季の旨味について、余す所無く書き綴っている。京都に生まれ、二度の大戦を乗り越えてなお包丁をふるいつけた彼は、俳諧に親しみ仏道を重んずる。自然を尊び足るを知るその心に、現代人が学ぶことは多いはずだ。学生身分は外食もままならぬものだ。本書を片手に炊事の喜びを噛みしめることで、豊かな食につながらんことを願う。(二三三頁 本体八三八円)

(井) (あ) (か)

増補 エロマンガ・スタディーズ

「快樂装置」としての漫画入門

永山薫著 ちくま文庫

サブカルの中でも語られることの少なかった巨大な市場、エロ漫画の歴史。性愛と暴力を描く表現は、蔑視と禁忌のレッテルを貼られながらも、脈々と受け継がれてきた。時に少女漫画や同人誌と影響しあいながら、漫画史の中に多様性を生み出してきた。性表現は公にできないが、必ず時代の後ろ側に存在し、背徳と共に必要とされる。その歴史の一端を見つめてほしい。(三八四頁 本体八六〇円)

僕は君たちに武器を配りたい

エッセンシャル版

瀧本哲史著 講談社文庫

「本書は、これから社会に旅立つ、あるいは旅立ったばかりの若者が、非情で残酷な日本社会を生き抜くための、ゲリラ戦のすすめである」。スコアで定量化できる勉強だけがウリな大学生は「コモディティ」になり、社会では生き残れないと著者・瀧本氏は言う。そこで彼がすすめるのが「投資家的な生き方」だ。それは何かかって？ 甘えんな。自分で読んで確かめろ。(二二七頁 本体五〇〇円)

(き) (せ) (の) (出) (席) (点)

ひとり暮しの戦後史

塩沢美代子・島田とみ子著

岩波新書

第二次大戦に敗れた日本で、独身の生涯を選んだ女性たちがいた。その内幕が、多様な証言と、実感に訴えるデータに基づき語られていく。その中で明らかとなるのは、彼女らの自立と自由を阻む不平等な社会の仕組みである。因習が、制度が、個人々人を縛るドグマが、戦後の経済大国の下積みを要求した。超独身大国を目指す現代日本の、直視すべき地続きの歴史だ。(二二九頁 本体七八〇円)

この世界の片隅で

山代巴編

岩波新書

原爆投下から二〇年後本書は刊行され、あの映画の大ヒットと共に復刊した。被ばくを経験した人々の、その後の苦悩。原爆投下後の広島で時に入は醜悪になり、差別は激化し、それでも人間は生きていく。常にマイノリティーの立場を考え、見過ごされがちな苦しみの声を記録した本。もう一つの「この世界の片隅」に、今一度耳を傾けてほしい。(二四〇頁 本体八二〇円)

(あ) (か) (せ) (の)

風と共に去りぬ

マーガレット・ミッチェル著
荒このみ訳 岩波文庫

名著とは、人間の歴史の中で何度も必要とされる本のことだ。南北戦争期のアメリカを書いた本書は、時代や地域を超えて今私たちの社会につながっている。恋愛物語を読みながら人種差別や敗戦、女性問題も捉える作品。そんな社会問題なんて考えたくないよと思っただそのあなた、まずは面白いから手に取ってみて。気がつけば考えてるから。

(第一巻 四六〇頁 本体九〇〇円)

ダブリナーズ

ジェイムズ・ジョイス著
柳瀬尚紀訳 新潮文庫

アイルランドの首都・ダブリン。少年は少女を崇拜し、青年は熱狂に身を投じる。ある女性は窓の外の灯りを眺め、遠き日の誰かを想う……。しかし、どの短編を読んでいてもその根底で拭い去れない閉塞感が漂っていることに気づかされる。一つの街に生きる人々の世界を、悍ましいほどに鋭く描き出した名作。痺れるような読書体験に、是非足を踏み入れて欲しい。(三九二頁 本体六三〇円)

(せつせの／＼ま)

チャンドス卿の手紙／アンドレアス

ホーフマンスタール著
丘沢静也訳 光文社古典新訳文庫

本書には世紀末ウィーンに舞い降りた若き天才の散文作品五編が収められている。メルヘンや教養小説など、西洋の文学者達が練り上げてきたジャンルに各作品は分類し得る。だが単なる継承ではない。格調高く細やかな描写と、むせかえるほど肉感的な読み心地は、時代と作家の結晶と言えよう。なお表題作は歴史の傑作であり、語ることできぬ魅力があると言っておく。(二六四頁 本体八八〇円)

天使の蝶

フリーモ・レーヴィイ著
関口英子訳 光文社古典新訳文庫

「私の生はちょうど二つに割かれて」いる——ホロコーストを生き延び、「これが人間か」と終生問い続けたレーヴィイ。日本では記録文学者としての「半生」ばかりが注目されるが、彼は化学者でもあった。本書はもう一つの「半生」の経験や知識が光るSF短編集。「フタル酸グリセリン」や「痲状地衣植物」など専門用語を散りばめ、どこか哀しく奇怪な世界へ誘う。(四〇七頁 本体八八〇円)

(とよ／＼リンド)

愛の妖精

ジョルジュ・サンド作
宮崎嶺雄訳 岩波文庫

舞台は一九世紀のフランス。遠く古めかしい設定だが、描かれる心情は相当リアルだ。働き者で「モテる」弟フンドリー。彼に執着し自己を見失う繊細な兄シルヴィネ。そして村はずれに住むキレ者少女ファデット。誰に自分を重ねるかは読者次第だ。「ロマンがあるね」と冷笑するの面白い。革命の時代に書かれた恋物語は、美化された農村の虚構なのだから。(三四六頁 本体九二〇円)

悪文 伝わる文章の作法

岩淵悦太郎編著
角川ソフィア文庫

読みやすい文章とは何か、書評を書く時にいつも考える。いい文章の真似をしてもそこに自分らしさを加えた時におかしなことになったりする。ダメな部分を直していく、それも一つの方法である。例文の言葉遣いが些か古めかしく思えるのは残念だが、裏を返せば本書の内容が時代の変化を超えて必要とされる証ではないだろうか。

(二二八頁 本体八〇〇円)

(とよ／＼ぬい)

二十億光年の孤独

谷川俊太郎・川村和夫・
W・I・エリオット著 集英社文庫

一七歳だった谷川俊太郎は、その若さにて一つの成熟を見せていた。誰もが経験し、そして誰もが忘れてしまふ、儂さと脆さを詩に交えていた。後に戦後詩人の代表となる彼の処女作は、深い深い孤独に満ちている。人間の寂しさと虚しさに美を感じる人は、一度本書を開いてほしい。出会った詩を朗読しながら、二十億光年の孤独を分かち合おう。

(二七二頁 本体五六〇円)

悲しみの秘義

若松英輔著
文春文庫

古、「かなしみ」とは「悲しみ」「哀しみ」だけではなく、「愛しみ」や「美しみ」でもあったという。詩人・若松英輔は宮沢賢治や石牟礼道子、リルケやプラトンの残した言葉を引きつつ、悲しみを通じてしか開かない扉へと私たちを誘う。立ち止まり、声に出して読んでみてほしい。こころの宇宙、「悲しみ」という暗闇に、一筋の光が差し込んでいる。

(一三三頁 本体七三〇円)

(きもの/石透)

石原吉郎セレクション

石原吉郎著 柴崎聰編
岩波現代文庫

「ジェノサイドのおそろしさは、(……)そのなかに、ひとりひとりの死がないということ」と、シベリア抑留を経験した石原はこう断言する。これを読んだあなたは疼きを感じないか。重症者〇〇人、死者〇〇人……無論コロナと大量虐殺は次元の異なる物で、その比較には慎重であるべきだ。けれども、今だからこそ彼の言葉は一層私たちに迫るのではないかとも思う。(三六八頁 本体一〇〇〇円)

こころの病に挑んだ知の巨人

一齋正馬・土居健郎・河合隼雄・木村敏・中井久夫
山竹伸二著 ちくま新書

大学に入学して精神医学や心理学を受講してみても、自分の心の悩みに真正面から答えてくれている気がしない。そんな時は「こころ」の病に挑んだ大家の著作に触れてみると良いかもしれない。京大出身の河合隼雄、木村敏、中井久夫ら五人の精神科医、心理臨床家の思想と実践を分かりやすく解説してくれている本書を糸口に、「こころ」を巡る旅へ出よう。(一三〇四頁 本体九〇〇円)

(リンダ/石透)

新版 自然界における左と右

マーティン・ガードナー著 坪井忠二・藤井昭彦・小島弘訳 ちくま学芸文庫

左手と右手をどう説明すればいいか？ 単純だが困る質問だ。この世界には左右の別のある現象や事物が多数存在する。本書では巻貝の巻き方や心臓の位置など身の回りの事柄から電子の回転や地球の自転まで幅広く、左右の分かれる事例を取り上げてその理由を考察する。文庫版となって手に取りやすくなったのを機に一度読んでみてはいかがだろうか。(上巻 三七二頁 本体一三〇〇円)

宇宙創成はじめての3分間

スティーブン・ワインバーグ著
小尾信彌訳 ちくま学芸文庫

今日では一般的な理論として認められるようになったビッグバン。宇宙に始まりがあり現在でも膨張を続けるという大胆な主張の原理とその構築の歴史を、難解な数式を使うことなくほぼ文章で解説しているのが本書である。体感することはほぼ不可能だが、想像力で壮大な宇宙の歴史を見通してみたいと思わせてくれる。理系でなくとも一読を勧めたい。(三二七頁 本体一三〇〇円)

(いね)

社会学の名著30

竹内洋著
ちくま新書

学問の地図を広げる作業は、何かと挫折するものだ。難解な原著に立ち向かわずとして、全く歯が立たず、その学問分野を、あるいは勉学自体を嫌いになるケースは、決して少なくない。そこで、社会学の名著を重要概念付きで紹介してくれる本書を薦めたい。結局、万里の道も「ミラー」から始まるのだ。前途多難な学問の道の「難」が少しでも減ることを願っている。(二四八頁 本体八四〇円)

当事者主権

中西正司・上野千鶴子著
岩波新書

上野千鶴子の名前を知っていてもフェミニストであることが知らない人は多い。なぜ上野は女性の権利を主張し続けるのか。合言葉は「私のことは私が決める」。それは女性だけの問題ではなく、当事者主権という問題なのである。障害者運動を牽引してきた中西正司との共著であることで、その問題の射程の広さを知ることができる一冊。

(二二六頁 本体七八〇円)

(まごゆ／石透)

コミュニティ 安全と自由の戦場

ジグムント・パウマン著
奥井智之訳 ちくま学芸文庫

家庭・学校・会社……、人は様々なコミュニティに属する。コミュニティは、一方で自分を含める所となり、他方では自分の自由を束縛する桎梏となる。コミュニティにおける結び付きを紐帯とするか束縛とするか。自由を重視する社会が切っけだった束縛が人々を孤独へと陥れる。現在の社会が抱える問題を、著者の分析をもとに改めて考えてみたいものだ。(二五〇頁 本体二一〇〇円)

日本とアジア

竹内好著
ちくま学芸文庫

第二次世界大戦を経験し、後に戦後知識人として活躍した竹内好。丸山眞男と対立的に語られるが、両者はともに敗戦の原因と反省を模索していた。鲁迅研究者として文学から中国の近代化を分析し、そこからアジアを語る中で相対的に日本の位置を思索した竹内。今再び中国が強国となる時代において、彼の思想を再読してもいいかもしれない。

(四九二頁 本体二五〇〇円)

(ない／きもの)

老子 全訳注

池田知久著
講談社学術文庫

京大に無事に合格し、これから勉強にサークルにがんばるぞ〜！ それもイイけど、一歩立ち止まってみない？ 「道」「無為自然」「小国寡民」などを説く老子。その思想を本書で覗けば、その世界観に思わず魅力を感じるだろう。「漢文ちゃんと勉強してなかったし……」って人も大丈夫。ちゃんと日本語訳ついているから。理系の人もちゃんと楽しめる、と思うよ。いやマジで。(八六二頁 本体三〇〇〇円)

痴愚神札賛

エラスムス著 沓掛良彦訳
中公文庫

賢さが少ないほど幸せになれる。痴愚の女神はそんな自画自賛をする、賢人・識者とされる者の愚行や狂気を証しとして。当時の知識人である作者エラスムスが、笑いというオブラートにぐるんで世に投げた風刺の書は、古典でありながら現代の我々の胸をも突いてくる。愚かさとは、翻って賢さとは。本書を読むと改めて作者から問い直されているように思える。(三二八六頁 本体八五七円)

(出席点／ない)

世界史の哲学講義(上巻)

G・W・F・ヘーゲル著

伊坂青司訳 講談社学術文庫

世界史なんてもう一生やりたくない——受験をくぐり抜けてきた皆さんのなかには、こう思っている人もいられるかもしれない。しかし、そんな人にご薦めしたいのが本書『世界史の哲学講義』。大哲学者ヘーゲルが描く世界史は、受験科目の世界史とは一味違う。古代から近代へ、東洋世界からゲルマン世界へと、縦横無尽に駆け巡るスリル溢れる叙述をぜひ。(上巻 四六四頁 本体一四九〇円)

人間の条件

ハンナ・アレント著

志水速雄訳 ちくま学芸文庫

何回読んででもよくわからない。だけどなぜか何回も読んでしまう——そんな不思議な魅力をも、本書は放っている。「私たちが行っていること」をテーマに据えたこの浩瀚な書物は、労働、仕事、活動という三つの営みをめぐる考察を展開しながら、最後にはこう憂える——私たちは、労働以外にもはや何も知らない労働する動物に成り果てたのではないかと……。 (五五〇頁 本体一五〇〇円)

(七五)

ロゴスとイデア

田中美知太郎著

文春学藝ライブラリー

言わずと知れたギリシア哲学の大家による論文集である。過去、未来、ロゴス、イデアなどと題された各章で、過去の存在は一体いかなるものなのか?といった問題が改めて取り上げられる。考察の足掛かりとなるのはもちろん、古代の対話篇や悲劇作品であるが、これら手垢にまみれた古典の寄せ集めではない、切れ味のよい議論を、読者は見届けるところができる。(四〇〇頁 本体一四七〇円)

カント入門講義

超越論的観念論のロジック

富田恭彦著 ちくま学芸文庫

本書の名誉教授である著者が解説するのは、今アフリオリな総合判断はいかにして可能となるか?という、『純粹理性批判』に提示された哲学史上の難問である。この問題に直面するまでにカントが辿った道のりには、イギリス経験論から受けた影響、さらにはその難解な議論の中に現れる「直観」や「対象」といった術語の由来まで丁寧にまとめた、充実の一冊である。(三三〇頁 本体二二〇〇円)

(八雲)

心と他者

野矢茂樹著

中公文庫

実在する世界で出会う他者たちも、私が眺めているものと同じような世界を眺めているに違いない——では、この日常的な実感は、いかに根拠づけられるのだろうか。本書が描くのは、ウィトゲンシュタインや師・大森荘蔵との格闘の末に著者が見出した、独自の思想の足跡である。平易な言葉遣いで哲学することのお手本としても、本書を繙く価値は決して少なくない。(三八四頁 本体八五七円)

英米哲学史講義

一ノ瀬正樹著

ちくま学芸文庫

本書は「英米哲学」の歴史を、イギリス経験論をひとつの源泉に、やがて功利主義や分析哲学といった、計量化志向の思想を生み出したものとする。ロックらの古典的名著はもとより、自然主義や正義論の分野でなされる現代的な議論に至るまで、その叙述は簡潔にして行き届いたものである。初学者が基礎知識を学ぶ教科書としてもお薦めしたい好著となっている。(三八四頁 本体二二〇〇円)

(八雲)

新刊コーナー

0メートルの旅

日常を引き剥がす16の物語

岡田悠著
ダイヤモンド社



旅とは何か。小学校の頃流行った「道路の白線を踏み外したら死ぬ」という遊びは、いつもの帰り道をサバイバルな世界へと塗り替えた。このような、日常が違う角度から見えるようになる体験こそが「旅」なのである。

普段会社員として働く著者は、休暇を伴っては旅に赴く。本書はその記録である。家から一六〇〇万メートル離れた南極の旅物語からスタートし、海外の旅、日本国内の旅と、だんだんと家から目的地への距離は短くなっていく。最終的には家から0メートルの、自分の部屋を旅する話となる。

家を離れずに旅などできるのかと、疑問に思うかもしれない。しかし旅行記を読み進めるにつれ、納得するはずだ。著者の旅人魂は並大抵ではない。

例えば第三章では、江戸時代の地図に載っ

ている道のみでの移動を試みるのだが、その徹底ぶりがものすごい。目の前に飲食店があっても、古地図に道がなければ入ることができない。目的地まで通常の何倍も大回りすることもある。しかし著者はルールを忠実に守り、一週間もの間、古地図の世界に没頭し続ける。日常を離れる勇気と、予定不調和を楽しむ気概が、彼の旅を作っている。

南極への過酷な船旅や、初対面のモロッコ人の家に泊まる体験は、非日常への渴望が引き起こした。平凡な毎日を引き剥がし、未知の世界へ飛び込む覚悟さえあれば、どんな距離でも「旅」に変わるのだ。(投稿・茫漢)

(二八七頁 本体一六〇〇円 12月刊)

ブルーストを読む生活

柿内正午著
エイチアンドエスカンパニー



『綴業』読者には自明かもしれないが、本書を読んであえて強調したくなった。

それは、「本と共に

ある日常は喜びだ」ということである。背伸びして選んだ難解なものでも、くすくす笑えるものでも、あるいは著者と二対一で向き合

うのも、誰かとあたたかうだ議論しつつ読むのも楽しい。本書には、書物がもたらすそんな嬉しさがあふれている。

著者は、趣味で多読にいそむサラリーマンだ。そんな彼がブルーストの大長編『失われた時を求めて』をきっかけに、毎日の読書とそれから揺り動かされる心情を日記に残すこととした。約一年にわたる記録はちょっとした辞書ぐらいの分厚さで、ささやかなものの集積こそが日常なのだということをフィツカ的な形で証明している。「サッカー部の部室に入り浸る美術部員」のように本を読みたいという彼は、雑多な書物を紐解き、それらの「文体や展開が、実生活と相互に関わり合い混濁していくよう」に感じながら日々を綴る。そして、その混合物は読者である私たちの生活にも浸透し、作用する。

本書の魅力は、本編『失われた時を求めて』のごとく、そこで小気味の好い脱線が繰り広げられることにもある。私たちはおそろく、大学で講義を受けるよりもずっと前から、脱線の愉悅というべきものを知っている。逸れた横道に有用性はさほどないかもしれない。ただしそこには紛れもなく、豊かな一隅がある。そんなことも再確認できる、相棒のような一冊だ。(投稿・おおむら)

(七七八頁 本体二九五〇円 1月刊)

海をあげる

上間陽子著
筑摩書房

かつてシモーヌ・

ヴェイユは言った

——「半分つぶされた

た虫のように、地面の上をのたうちまわ

るような打撃をうけた人びとには、自分の身

に起こったことを表現する言葉がない」と。

本書に登場するのは、そんな、自分の身に起

こったことを表現する言葉がない人たち。し

かしそれでも著者は、彼ら沈黙してきた人び

との、いや、沈黙させられてきた人びとの声

ならぬ声を聞き取るうとする。そのようにし

て生まれたのが、沖繩をめぐる著者初のエッセイ集、『海をあげる』だ。

小学生の頃からずっと父親から性暴力を受けてきた七海。恋人の春菜に援助交際をさせて金を稼いでいた和樹。三人の米兵に浜辺で強姦された小学生の女の子——沖繩に生きる

彼ら／彼女らの物語を読むと、胸の真ん中が

押さえつけられるような、内側からギュッと

握りしめられるような、そんな感覚に陥る。

ただこの見逃してはならないのは、彼ら／

彼女らの物語には、沖繩の社会構造が影を落としていたということ。本書が紡ぐ物語には絶えず、沖繩の抱える問題が見え隠れする。

沖繩は本当にたくさん問題を抱えている。

汚染されるきれいな水、青い海に投入される土砂、そしてオスプレイの爆音——しかし、

沖繩の人びとは沈黙している。「切実な話題は、切実すぎて口にするのができなくな

る」から。それでも著者は、彼らの声を聞き

取るうとする。その声が伝えようとしている

ことを、私たちに知ってもらうために。だから

次は、私たちが聞き取る番だ。(ば)

(二五六頁 本体一六〇〇円 10月刊)

非国民な女たち

戦時下のパーマとモンペ

飯田未希著

中公選書

理想ととこれる容姿

というのは時代によ

って変化する。今で

は流行というよりも

しる普遍的なおしゃ

れとして受け入れられているスカートやパー

マも、ある時代の人々の流行の波によっても

たらされた。今回紹介する著者の飯田未希は



大阪大学大学院で英文学を研究した後、ニューヨークにて女性学修士号、社会学博士号を取得している。現在は、立命館大学教授であり今回が初の著書である。

本書の舞台は戦時期。「華美である」「日本

女性らしからぬ」洋服を着たおしゃれが好き

な女性たち。彼女たちに対して、戦場に赴き

帰郷した軍人、また報國的な活動をするメデ

イアから批判が起る。パーマというものが、

欧米的なものとして嫌悪され、更には華美な

ものとして悪評をつけることでパーマ＝非国

民というレッテルが女性たちに貼られたので

ある。しかし、彼女たちはパーマやスカートを

を美しいと思う気持ちを戦争のために諦める

ことのなかった。そうした様子が当時の新聞

記事や美容家山野愛子の自伝などを用いて詳

細に語られている。

戦争を教科書のみで学んだ大半の者にとっ

て、本書から得る知識は意外なことばかりで

あるう。当時の女性が社会や国から抑圧され

た環境の中生きてきたのは想像に難くない。

しかし同時に、女性は時代への反骨精神から

髪型や服装で自己を発信した勇気を持って

いた。現代に足りないのは、流行がそうであ

るように、国民自らが社会の大海原で波を作

る力なのかもしれない。(投稿・トントウ)

(二七四頁 本体一七〇〇円 3月刊)

地下 ある逃下

トーマス・ペルンハルト著

今井敦訳

松蔭社

「反対方向に」行こう。学校へ行くのを辞め、市中の人々に忌み嫌われるあの場所を働こう。」と



うだつておんじ」なのだから。

シエルトハウザーフェルト団地。ザルツブルクの周縁に位置するこの場所に生まれた者は、決して報われぬ一生を送るといふ。立ち並ぶ安っぽい住居にはアル中が、娼婦が、あらゆる惨めな人々が隔離され、お上品な市民達から一方的に差別されている。この図式の中で本書の語り手は、上流市民の耐え難い規範に抗い、団地にある地下食料品店の見習いとなる。芸術的感性を備えつつ労働者の生活に励む「私」は、そこを訪れるアウトサイダー達の噂話を聞き、この地獄に近い場所から起る現実を、息が詰まるような文体で次から次へと述べながら、合間にその過去を想起する現在の「私」の思索を織り交せていく。

ペルンハルトの作品はここ数年立て続けに翻訳が進んでいる。彼の自伝的五部作の二作

目にあたる本書では、罵倒名人の言語哲学が展開される。団地で発生する辛苦は「私」にとって事実なのだが、それを語らせまいとする者を生む。たとえその者たちの神経を逆撫ですることになろうとも「私」は書く。書かすにはいられないという。それが主観的な事柄に終始しようとも、「真実を言わう」とすることが肝心なのだ。世界は無意味で、全て無価値かもしれない。だから書くのである。なお訳者あとがきでは、脚色された部分に關する最新の知見が述べられている。作家は真実を、嘘を、文字を書いたのだ。(とよ)

(一六〇頁 本体一七〇〇円 9月刊)

闇の自己啓発

江永泉 他著

早川書房

自己啓発。自分を

社会に合わせてアップデートするために新しい視点を得ようとする方法。こ



れまで数え切れないほどの自己啓発書が世に出ている。だがそれは社会に合わせることに出来る人間のためのものだとはいえる。自分

を合わせることが出来ず、ゆえに既存の社会の中で生きることに関難を感じる人間が、それでも生きていくためにはどんな視点を得ればいいというのか。合わないなら超えていけばいい、意識だけでも。これは社会から遊離していくための自己啓発書だ。

元々が読書会から始まっているため、本文も座談会形式で構成されている。話題の土台にあるのはインターネットやITテクノロジー。ネットから見えた社会のあり様について、その時々々の時流を反映した作品や文献、かつての予言的な書物を取り上げられる。ただ、とりとめのないまま様々な文献が提示され、話題は拡散し、よくいえばカオス、悪くいえばまとまりなく話が続いていく。長文の注釈とも相まって、知識を整理して話題を追いかけていくのがなかなか難しい点は残念である。

同時代人としてその中で生きてきた世相や社会について語ることに、それは同時に、社会と対峙する自分自身の視点や生きづらさを回顧することでもある。それは同じように悩む人々の共感を得ることに繋がるだろう。テクノロジーを用いた意識・概念の変革や反出生主義などは逃げ道の模索といえる。だが逃げる先に何があるのか。わからないから「闇」といっしかないのかもしれない。(ね)

(四一六頁 本体一九〇〇円 1月刊)

眼の神殿

—「美術」受容史ノート

北澤憲昭著
ちくま学芸文庫



「美術と芸術の違
いとは何だろうか。」
「私たちは何故、
日本画と洋画を当然
のように区別してこ
るのだろうか。」

大学生になって美術館を巡った時、このよ
うな疑問におつかることもあるだろう。当た
り前のように使っている「美術」という言葉。
しかしその概念が日本社会に定着し、今のよ
うな意味を帯びるまでには様々な変遷があっ
た。本書では入念な史料分析をもとに、美術
という概念の生成を考察していく。制度をめ
ぐるこの分析は、美術という概念を通して、
日本の近代化をめぐる考察でもある。

その中心に居るのが明治の画家、高橋由一
だ。洋画の開拓者で知られる彼は、未完のプ
ロジェクトに終わった「螺旋展画團」を構想
した。日本においてはじめての美術館になる
予定だったこの構想の中で、江戸の系譜と西
洋の歴史を軸に、美術ないしその鑑賞の在り
方を、どのように社会化していくかが検討さ

れていた。

折しも時代は戦時期に突入し、国粹主義の
波にのまれていく。その中で「日本の芸術」
が創出され、さらに視覚芸術をめぐる作品が、
美術として特殊な意味を帯びていく。

視覚優位の近代、芸術をめぐるナショナルリ
ズム、翻訳の過程で特殊な意味を帯びていく
言葉。考察する対象は広く、美術に関心があ
る人だけでなく、歴史や国家、言語に興味が
ある人も面白く読めるはずだ。三〇年前に公
刊された本の文庫化だが、今も読み継がれる
べき一冊である。(きもの)

(四六四頁 本体一五〇〇円 12月刊)

現実性の問題

入不二基義著
筑摩書房



私たちは現実の中
に生きている。では、
その「現実」とは一
体何なのだろうか。私

たちが説明に窮するこの謎に、哲学者・入不
二基義は迫る。本書は、彼が近年発表した論
考を中心に、その成果をまとめたものである。

素朴な言い方で「現実」とは、ここに

これと言って片付けられてしまうものかもし
れない。しかし、入不二の企図においてそれ
は、可能性・可能性・潜在性という三つの水
準を経由する動的な環(めぐるエネルギー)と
解釈される。探究は、「何であれ」何かが
起こった(起こっている)という圧倒的な事
実性に始まる。このような事実的な在り方に
は、その在り方を否定した反事実的な想定な
ど、多様な可能的在り方を立ち上げていく余
地がある。ここで現実とは、可能性のワンオペ
ゼムとして相対化されるが、一方でこれは潜
在的在り方に転回する端緒ともなる。この潜
在性がやがて、事実的在り方に顕在化するこ
とで、三水準を巡るひとつの円環が出来する。

この「円環モデル」をはじめ、図式を積極
的に取り入れた叙述は「入不二ワールド」こ
こにあり、といったところである。その本格
的な議論は、タイトルのシンプルさとは裏腹
に、正しい理解を求めれば求めるほど手強い
ものとして立ち現れる(評者自身も、その十
全な理解に至っているかといえは心許ないと
ころなのだが)。とはいえ、著者が自ら組み
上げた緻密な体系の中で「現実性」と格闘す
る様は、本書の大きな読みどころでもある。
彼の紡ぎ出すその世界の魅力に、読者も酔い
れていただきたい。

(四三三頁 本体三二〇〇円 8月刊) (八雲)

北條民雄を今読むとどういふ

昨年一月、北條民雄の代表作を中心に集めた短編集『いのちの初夜』が復刊された。「コロナ禍に必ず読んで欲しい本！」という帯と共に、店頭で目にした方も多いのではなからうか。北條が再び目の目を見ての今、彼の作品に見出せる可能性に迫ってみよう。

北條民雄の生涯

一九一四年朝鮮京城府に生まれ、徳島で育った北條。彼にハンセン病の自覚症状が現れたのは一九の春だった。この時の体験は随筆「癆病」〔北條民雄 小説随筆書簡集〕所収 講談社文芸文庫〕に詳しい。ある日足の麻痺、そして眉毛の脱毛に気づいた彼は、医師からハンセン病と診断される。当時の心情を彼はこう綴る。「大して絶望もしないで、私は極めて平然としていた。しかしその平然とした気持の底に、真黒な絶望と限りない悲哀が波立っていることを、私はかすかに意識していた。」機会あらば湧きあがんとする絶望と「日常」から放擲されたような孤独感、それらに「何でもない（……）」と声に出して無理に呟き相戦う彼の思索や葛藤は作品世界にも深く刻まれている。その後全生病院に入院した彼は本格的に創作を開始し、川端康成を師と仰ぎながら「文學界」などに作品を発表。一九三七年結核により死去する、享年二三歳だった。

「癆病に成りきることが何より大切だと思えます」

第二作にして代表作となった『いのちの初夜』(『いのちの初夜』所収、角川文庫)、北條文学を考る上でこの作品は外せない。ハンセン病に罹患した主人公尾田の、入院初日における同室の患者佐柄木との交流を描いた本作。すべてが悪夢に思われる院内で過ごすうちに不安、惨めさ、屈辱に押し潰された尾田は自死を試みるが仕損じ

る。一部始終を自撃した佐柄木は彼の苦悩を理解し、それでも繰返しこう語り掛ける。「とにかく、癆者に成りきることが何より大切だと思えます。」「癆者に成りきる」とはどんな謂いか、それは本作を代表作たらしめてきた次の場面に凝縮される。

自死未遂の後、夜の当直をする佐柄木と共に部屋の様子を眺める尾田。重病の患者たちを指して佐柄木は語る。(彼らは)「人間ではありませんよ。生命です。生命そのもの、いのちそのものなんです。(……) 誰でも癆になった刹那に、その人の人間は亡びるのです。(……) けれど尾田さん、僕らは不死鳥です。新しい思想、新しい眼を持つ時、全然癆者の生活を獲得する時、再び人間として生き復るのです。」佐柄木の説く「癆者に成りきる」とはハンセン病に見えるネガティブな印象や考えによって現実を否定し尽くした先にある新しい生／意味の獲得なのだ。この時人々は「いのち」を介して繋がり、「日常」との新たな結びつきを探ることが出来る。佐柄木は不安や絶望を否定しない。むしろ「生きる意志こそ絶望の源泉」とさえ述べる。ここに於て絶望も悲哀も生の裏返しであるのだ。だからこそ物語はこう締められる。「佐柄木の世界へ到達し得るかどうか、尾田にはまだ不安が色濃く残っていたが、やはり生きてみることに、と強く思いながら、光の縞目を眺め続けた。」

「生きるか死ぬか」という究極の問いに対峙する中で本作は生まれたと北條は吐露する。生きる態度はその次からだと。北條文学が秘め持つ繊細さ、力強さ、そして生への真剣さは、私たちを静かに圧倒し、自身の生への眼差しを問い直させるだろう。(リンダ)



ペンテジレアーアニー二〇二〇を振り返る

ドイツの作家クライストが、今年で没後二二〇周年を迎える。彼は数多くのファンを魅了する天才詩人だ。以下ではその代表作『ペンテジレアー』に焦点をあてて、翻訳、上演、文学論という三つの切り口から、苛烈な情念の詩人を巡る昨年の展開を見ていこう。

ペンテジレアー 嗚み殺したいほどの愛

ギリシア神話に材をとったこの悲劇には大胆な改作が施されている。もともとペンテジレアーは、トロイア軍とギリシア軍との戦争に横入りするアマゾネス集団の首領という脇役であった。神話にて英雄アキレスに倒されるこの女傑は、詩人の戯曲では逆に、英雄の全身を食い破り、彼を絶命に至らしめる。しかもそれは、アキレスと心を通い合わせてすぐの出来事なのだ。これには女人国家の面々も驚く。外部の男は子種を運ぶ道具に過ぎず、ことが済めば解放される習わしなのだから。愛と憎しみが溢れ出すペンテジレアーは、戦闘の負傷で正気を失ったと語られる。が、真偽は不明である。劇の終盤にて、彼女は己を否定しつつ肯定する。「接吻 (Kiss) と嗚みつき (Bisss) 、韻が合うのではないか。心から愛する者にとって、二つは繋がっているのだ。」そして彼女も息を引き取るのだった。

右の引用は昨年一〇月に出版された仲正昌樹訳『ペンテジレアー』（論創社）から採っている。歯切れの良さが特徴的な新訳だ。

同書が用いられた京都での公演では、戦争と愛の舞台に新たな演出が試みられた。対峙する女王と英雄による結合行為。原作に描かれぬこの「薔薇祭」を象徴的に表現する中で、自他の接合面を探る根源的な営みの描出が追求されたのである。それだけではない。劇の終盤、アキレスの心臓を引き裂いたのちに独りになったペンテジレ

アーは、突如として現代人の衣服習慣を身に付け、観客の前に立ったのだ。読み手を困惑させるクライストの戯曲は、観客に一層の解を迫る現代劇へと展開されていた。

命を賭して求める双務的理想状態

言い知れぬ感動を惹起するこの難解な戯

曲に際し、参照すべき近刊書がある。昨年

三月に刊行された文学論集『ハインリッ



ヒ・フォン・クライスト「政治的なもの」をめぐる文学』（インスクリプト）である。寄稿者の一人大宮の論において、ペンテジレアーの行為は、女人国家の起源を再考するものと解釈される。その起源とは、夫の殺害をもって男性への隷属状態を終わらせた最初のアマゾネスの事蹟だ。アマゾネスたちは建国以来この枠組みを大義として固持しながら、世代交代の政を続けてきた。だが大宮は、戯曲に語られる時代には、共同体の大義が形骸化しつつあると指摘する。部外者の男性を単なる婿とする状況では、元始の時代にあった「戦」と「愛」の不可分な結びつきが忘却されているからだ。情性的な国体の維持。その現状を打破するために、ペンテジレアーは真剣な殺意を心からの愛に重ね、アキレスに挑む。それは「神権政治」の破壊でもある。実はアマゾネスは、軍神マルスの依代として捕虜たちを婿としていたのだ。この男神中心の体制に抗うため、ペンテジレアーは神の代理でなく個人としてのアキレスに向き合い、「人間政治」に基づく双務的関係を命懸けで希求したのである。

理想を求める女傑の姿は、現代の卑小な対人関係に強烈な返り血を浴びせる。その刹那に、読者はみな魅了されるのだ。（とよ）

編集後記

はじめまして。今月から編集委員をしている「ばや」と申します。普段は主に、ユダヤ系ドイツ人の思想家、ハンナ・アーレントを研究しています。アーレントが遺した文章とにらめっこする毎日です。視力がどんどん落ちていきます。

書評誌は、それを書く人も読む人も、新たな本と思いがけず出会うことのできる場だと思えます。書評誌は、心弾む未知なる出会いに満ち満ちています。本誌『綴葉』を通じて、そのような出会いを読者の皆さまにお届けすることができますように。(ばや)

こんにちは。八月から綴葉委員をしています。ましゅです。発達心理学の研究室でいじめの研究をして、家に帰ったらポエトリーラップを作る生活をしています。好きな作家は、川上未映子さん。漫画家なら、たなかのか先生。嫌いなものは、爆弾低気圧。

最近、就職活動なるものをしております。願わくば、出版社に勤めて、編集や販促に携わりたい。自分がそうであったように、偶然手にした作品によって、人生を豊かにされる人が増えたらいいなど……。そう思いながらこれからも頑張ります！(ましゅ)

当てよう！ 図書カード

一人の時間が多く昨今、よく絵を描いています。自分の絵を額に入れて廊下に飾ったら、少しだけ画家の気分になりました。さてここで問題、1906年浅井忠が設立し、工学博士武田五一によって設計された建物で、今も続く絵画教室といえはどこでしょうか。

1. 大地堂
 2. 野風呂記念館
 3. 藤井斎成会有鄰館
 4. 関西美術館
- (きもの)

《応募方法》読者カードに答えを書いて生協のひとことポストに入れてください(またはe-mail:teiy@s-coop.net)。正解者の中から抽選で5名の方に図書カードを進呈いたします。締め切りは4月15日です。

11月号の解答

11月号「四条河原町南東の角に入る次のテナントはどれ？」の解答は、2. エディオンでした。応募者15名中15名の方が正解でした。ご応募いただきありがとうございました。

当選者は、matsuriさん、おでんさん、ソロエルアリーナさん、もりかずさん、まなてい一さん(順不同)です。おめでとうございませう。(ましゅ)

読者がらひひひ

○対面授業が始まりました。これがないと「通信教育」。コロナの収束を願うのみです。

(農・NON)

——講義終わりに、友達とグダグダ話をして、そのまま飲みに出かけるあの時間が好きでした。コロナ明けが楽しみです。

○初めて読書カードを投函しました！編集委員の方に質問です。私は本が大好きなのですが、本を読むことは基本的にめんどくさいと感じてしまいます。本を読みたい。読まなくてはおもっていても、テレビ・スマホの誘惑に負けてしまうことがあります。ですが本も読書も大好きなので(矛盾しています)が……)もっとずっと本を読んでいられる人間になりたいです。何か良い方法があれば教えてください。(法科大学院・メイシユキ)

——投函していただき有難うございます。私も挫折してしまう本が多いのですが、読み飛ばしながら面白そうな箇所だけをまず読む、という方法がオススメです！何も初めから階段を上がるように読まないといけないこともないと思うので、自分の中で興味こそそれれた部分から前後を確認しつつ読んでいくことで、重い本も読めたりします！(ましゅ)